



『まなほ』での解説万葉歌一覧

歌番号	作者	原文	出典
巻4-698	石川広成	家人尔 恋過目八方 川津鳴 泉之里尔 年之隣去者	31号
巻8-969	湯原王	鹿乃之 加度打放 大夫之 板豐御酒尔 吾許尔家里	46号
巻8-1029	大伴家持	河口乃 野辺尔隣而 夜乃隣者 妹之手本師 所夢猶	34号
巻8-1030	聖武天皇	妹尔恋 吾乃松原 見渡者 潮干乃浦尔 多頭鳴渡	34号
巻8-1418	志貴皇子	石敷 誰見之上乃 左和良妣乃 毛要出春尔 成葉猶	11号
巻8-1419	鏡王女	神奈備乃 伊波瀬乃杜之 娘子鳥 痛莫鳴 吾恋益	8号
巻8-1481	紀郎女	妹奴妻云、和氣之為 吾手母麻尔 春野尔 拔流茅花曾 御食而肥摩	61号
巻8-1483	大伴家持	昼者咲 夜者恋宿 合敷木花 君耳得見哉 和氣佐倍尔	61号
巻8-1485	藤原夫人	磐公鳥 痛莫鳴 汝音乎 五月玉尔 相置左右二	62号
巻8-1486	志貴皇子	神名火乃 伊波瀬乃杜之 磐公鳥 毛無乃丘尔 何時來得	63号
巻8-1487	弓削皇子	磐公鳥 無流国尔毛 去而師香 其鳴音乎 聞者辛苦母	64号
巻8-1495	大伴家持の磐公鳥の歌	足引乃 許乃間立八十一 磐公鳥 如此間始而 後得恋可聞	95号
巻8-1537	山上億良	秋野尔 曉有花乎 指折 可伎敷者 七種花 其の一	44号
巻8-1538	山上億良	芽(子)之花 子花為花 芒麦(麥)之花 姪都志又藤袴 朝鳥(山)之花(其の二)	44号
巻8-1539	聖武天皇	秋田乃 穗田乎雁之鳴 聞尔 夜之穂垣呂尔毛 鳴渡可	33号
巻8-1540	聖武天皇	今朝乃日開 雁鳴塞 聞之奈倍 野辺能淺茅曾 色付丹	33号
巻8-1600	石川広成	妻恋尔 鹿鳴山辺之 秋芽子者 露露妻 盛須路由君	32号
巻8-1601	石川広成	目挽布 君之家有 渡奈須為寸 穗出秋乃 過良久借母	32号
巻8-1608	丹比真人	秋芽子之 上尔置有 白露乃 消可毛思奈万思 恋管不	27号
巻8-1609	丹比真人	宇陀乃野之 秋芽子師誓葉 鳴鹿毛 妻尔恋葉苦 我者	26号
巻8-1653	県犬養娘子	如今 心乎常尔 念有者 先咲花乃 地尔得落八方	45号
巻8-1654	娘上郎女	松蔭乃 淺茅之上乃 自齊乎 不令消得猶 吾者可聞奈	46号
巻10-2113		手寸十名相 籠之久知久 出見者 摩前之早芽子 咲尔	94号
巻12-3098	作者不詳	於能礼故 所置而居者 ？馬之 面高夫駄尔 乘而床來	15号
巻13-3312	天皇作	獵口乃 長谷小国 夜延為 吾天皇寸与 奥床仁 母者睡有 外床丹 父者睡有 起立者 母可知 出行者 父可知 野下玉乃 夜者親夫奴 幾許言 不念知 戀燈香間	36号
巻14-3374	武蔵国歌	武蔵野尔 宇良幣可多也伎 麻左旦尔毛 乃良奴伎美我名 宇良尔風尔家里	66号
巻19-4224	藤原皇后	朝露之 多奈引田為尔 鳴雁乎 留得哉 吾屋戸能波霧	55号
巻19-4268	孝謙天皇	此里者 楚而藉歌置 夏野尔 吾見之草波 毛莫知多里	36号
巻20-4297	大伴宿禰家持	乎美奈彈之 安伎渡疑之努葉 左乎之可能 都由和氣奈	99号
巻20-4518	大伴宿禰家持	加牟 多加麻乃能野曾 新年 乃始乃 渡都 渡流能 家布敷流 由伎能 伊夜之 家 就其隣	100号





『まなほ』での解説万葉歌一覧

歌番号	作者	原文	出典
巻1-2	舒明天皇	山常庭 村山有等 取与呂布 天乃香具山 隣立 国見 乎為者 国原波 埋立電 海原波 加万目立多都 吟吟 国曾 晴馬 八間訪能国者	87号
巻1-27	天武天皇	淑人乃 良跡吉見而 好常言師 芳野吉見与 良人四来	58号
巻1-34	川嶋皇子	原文武と持統批判	11号
巻1-64	志貴皇子	葦邊行 稿之羽我比尔 霜暮而 寒暮夕 憂之所念	98号
巻1-73	長皇子	吾妹子乎 早見涙亂 憂有 吾松搖 不吹有勿勒	85号
巻1-78	元明天皇	大夫之 願乃首為奈利 樹部乃 大臣 橋立良思母	71号
巻1-78	一云太上天皇	飛鳥 明日香能里乎 置而伊奈婆 君之当者 不所見香 毛安良車一云、君之当乎不見而香毛安良車	72号
巻1-79	作者未詳	天皇乃 御命良美 葉備尔之 家平振 羅國乃 泊瀬乃 川尔 杯浮而 吾行河乃 河隈之 八十阿不落 万段 祖為乍 玉梓乃 道行晚 青丹吉 櫓乃京師乃 佐保川 尔 伊去至而 我宿有 衣乃上從 朝月夜 清尔見者 傍乃穗尔 夜之霜落 響床等 川之水凝 冷夜乎 恩言 無久 通乍 作宮尔 千代二手尔 摩多公与 吾毛通武 青丹吉 掌樂乃宮尔者 万代尔 吾母得通 忘跡念勿	73号
巻1-80	作者未詳	孫の官位を戻して欲しい	73号
巻1-84	長皇子	孫の官位を戻して欲しい	15号
巻2-85	磐姫皇后	君之行 氣長成奴 山多都祈 迦加得行 待尔可待待	82号
巻2-91	天智天皇	妹之家毛 繼而見麻思乎 山跡有 大馬鶴尔 家母有深	3号
巻2-92	鏡王女	秋山之樹下燭逝水乃 吾許曾益目御念從者	3号
巻2-93	鏡王女	玉匣 覆平安美 聞而行者 君名者雖レ有 吾名之道家	4号
巻2-94	内大臣藤原原	玉匣 將見丹山乃 狹名 佐不羅達尔 有拂麻之弓	5号
巻2-103	天武天皇	吾里尔 大雪落有 大原乃 古尔之郷尔 落着者後	21号
巻2-104	藤原夫人	吾里尔大雪落有大原乃古尔之郷尔落着者後	22号
巻2-194	柿本人麻呂	川嶋の死にあたり、反逆と殺害を詠んだ挽歌	11号
巻2-195	柿本人麻呂	川嶋の死にあたり、反逆と殺害を詠んだ挽歌	11号
巻3-236	天皇作	不昧訪難云 殘流志斐能我 殘語 此者不聞而 朕恋 (戀)尔家里	49号
巻3-262	柿本朝臣人麻呂	八洲知之 吾大王 高輝 日之皇子 茂座 大殿於 久 方 天伝来 白雪仕樹 往來乍 益及常世	23号
巻3-264	柿本朝臣人麻呂	樹乃部能 八十民河乃 阿白木尔 不知代徑浪乃 去辺 自不母	1号
巻3-265	長忌寸卑麻呂	吾毛 喜来雨可 神之埜 歡野乃瀧尔 家愛 不	1号
巻3-266	柿本朝臣人麻呂	終海乃海 夕浪干鳥 汝鳴者 情毛思勢尔 古所念	2号
巻3-262	春日戴首老歌一首	角輝徑 石村毛不遇 泊瀬山 何時毛得超 夜者深去通 都	89号
巻3-304	柿本朝臣人麻呂	大王之遠乃朝廷訪難通馬門平見者神代之所念	98号
巻3-391	造須紫親世音寺別当沙弥満	鳥糞立 足柄山尔 船木伐 樹尔伐鼎都 安多良船村乎	84号
巻3-393	満實沙弥	不所見十方 孰不恋有米 山之末尔 射缺夜歷月乎 外 見而思香	70号





第98号：『万葉集』巻第1-64・志貴皇子作／志貴皇子ゆかりの寺百毫寺／編集部ティータイム（「所念」をめぐる）皇子の歌「所念」もやはり「防備せよ・備えよ」であった。

※文武の死を予測。鉄集め令を出して備えよという志貴。志貴皇子の山荘を寺にしたという百毫寺に残る不動明王など憤怒の像たちは志貴の怒りを表しているのか。

第99号：『万葉集』巻第20-4297・大伴家持作／隠岐經由の瀝人たち（その2）／編集部ティータイム（祭祀のことなど）

※志貴ゆかりの百毫寺は「手寸十名相」で詠まれた志貴皇子たちの「隠れ家」であった。家持は高円の地に祭祀を捧げるため酒壺を持って行った。

第100号：『万葉集』巻第20-4516大伴家持作／編集部ティータイム（百号！）／弓削島を訪ねる

※『万葉集』の最後の歌、家持が公式行事で詠んだ歌は、「夜も仕事（武具作り）を続けよ」との激励の句で終わっていた。新羅との決別を念頭に置いた作。日本は独自の道を歩み始めた。

第101号：『万葉集』巻第9-1665作者未詳／蛭子・少彦名・昔脱解・八束水臣津野命そして一寸法師は同一人物／まなほ百号を振り返る

※斉明に同行した男は新羅言葉で歌を詠んでいた。

第102号：『万葉集』巻第9-1667作者未詳／まなほ百号を振り返る 2／既刊 102号まで／「不飛不鳴」

※後押しをしてくれた志摩の人々に入手したものを分け与えるという文武の宣言歌は実行された。

「記紀歌謡」など

第14号：『続日本紀』童謡

第40号：日本書紀歌謡69・木梨輕皇子作+

第56号：「古事記歌謡50」

第83号：「日本書紀歌謡41」

第7号：三重県無形文化財「大王町わらじ曳き」祭文

金石文

第19号：（韓国国宝）「迎日冷水里新羅碑」碑文

第20号：（国宝）「隅田八幡人物画像鏡銘」銘文





第92号：十返舎一九の辞世を解く／十返舎一九の墓／編集部のティータイム（方向を間違えると徒労に終わる）

※写楽こと金弘道を支えた十返舎一九の父は朝鮮通信使通訳。その辞世には、父の国を思う心情が吐露されていた。

第93号：ふしぎな宝島「竹島」を洗う／鬱陵島同行記／編集部のティータイム（江戸時代は面白い）

※『三国遺事』に登場する「萬波息笛」は「難事解決」を意味する笛名だった。笛が作られた竹の生える「竹島」を実地調査。鬱陵島からは独島が見えた。

第94号：『万葉集』巻第2-2113／吉備の鉄を訪ねる／編集部のティータイム（解読奮戦記）

※棒抜き初句を始め埒の明かない第二句、「よめた」はずの終句には二重詠みが隠されていた。今までの万葉解読では解けない手法で書かれた歌は、全文暗号で「ひとまとめにして助けよ」という命令だった。ティータイムではその解読裏話を紹介。

第95号：『万葉集』巻第8-1495・大伴家持作／大和路を歩く・仕田原猛（寄稿）／編集部のティータイム（志摩半島訪問）／ニシブ三頭八足の地（韓国民話より）

※家持の歌で激しくけなされていたのは女帝元明だった。性交を表現する「霍公鳥」は文武の別名として使われていた。

2015年度（⑩：2015年7月から2016年5月まで）

第96号：『万葉集』巻第3-304・柿本朝臣人麻呂作／神武の上陸地・船出・発航の地を巡る／編集部のティータイム（「鉄取材」回想記）

※人麻呂の「所念」で終わる歌は、天武に対し「実子文武に気をつけよ・防備せよ」と呼びかけていた。

第97号：韓半島から日本列島への道／隠岐訪問

※日本海に浮かぶ島隠岐を経て日本へやって来た人々の群れには、三輪の神になった新羅男や神功皇后の祖先、知恵と医薬の神少彦名やオロチ退治で有名な素戔鳴、役行者といった多彩な顔ぶれが並ぶ
※李寧熙先生の入院で内容が変更になっています





2013年度 (㊤) : 2013年7月から2014年5月まで

第85号 : 『まなほ』で読み解く日本史と日本語／天武天皇終焉の地、敦賀（寄稿）

※『まなほ』84冊で解説された日本史と日本語の総まとめ。八世紀日本天皇家真の系図掲載。（李寧熙先生骨折入院のため内容変更になっています）

第86号 : 『万葉集』巻第8-1513・穂積皇子御歌／八雲立つ出雲／編集部 टीータイム（語源新解説の楽屋話）

※不比等が企てた聖武立太子を「足りない」と批判。皇太子入れ替えを要求した穂積は消された？聖武はそっくり真似た歌で反論。

第87号 : 金庾信の息子たち／『源氏物語』の中の、金庾信の子どもたち／探訪・美作の鉄／編集部 टीータイム（最古の文字を刻んだ土器と鉄剣のことなど）／愛隣文化賞授賞式写真

※日本の土台を作った文武。金庾信の子供たちは、長男・次男・娘・孫までこぞって来日し、文武を支えていた。

第88号 : 「かぐや姫」を洗う／民話に見える竹／編集部 टीータイム（女性文化賞のことなど）／李寧熙先生「女性文化賞」受賞

※かぐや姫は実在した。かぐや姫とは「製鉄国のお姫さま」を意味する名前だった。仲人は文武天皇。かぐや姫は全盛期の新羅王宮に迎えられた。

第89号 : 『万葉集』巻第3-282・春日蔵首老の歌／香春に比売許曾を訪ねる／編集部 टीータイム（金、銀、銅の前に鉄！）

※春日蔵首老は新羅の都徐羅伐にあった青年エリート養成所出身の製鉄技術者だった。いやいやながら不比等に繋がると決心した文武のブレーンは不比等の息子の舅になった。

2014年度 (㊤) : 2014年7月から2015年5月まで

第90号 : 「金官伽耶」の謎を解く／日本の中の金官伽耶・仕田原猛（寄稿）／金海取材同行記

※「鉄鉾石を砕き研ぐ国」の「生鉄里」には鉄・銀・鉛の採れる山があった。伽耶は日本に「引っ越し」した。証拠の神社が飛鳥に。寄稿は考古遺物を中心とした金官伽耶の足跡を網羅。

第91号 : 「金官伽耶」没落の謎を解くー「唐子踊り」額の十字の謎も併せて／日本の中の阿羅伽耶・小伽耶・大伽耶・仕田原猛（寄稿）／丹生茶碗祭りを見る

※大男智証王率いる新羅に浸食された金官伽耶の日本での拠点は吉備だった。寄稿は日本中の伽耶人進出地を推定。





第77号：牛窓「唐子踊り」の謎を解く①行事に迫る②歌詞に迫る／出雲路を歩く（その一）（寄稿）

※唐子踊りは伽耶の稚児舞。鉄鉾石を探しに地中へ向かう少年の姿を再現。寄稿は、李寧熙先生解説の出雲各地を実地踏査。

第78号：神功皇后の謎を解く―「書紀」「新羅征伐」を解体すると……／出雲路を歩く（その二）（寄稿）／編集部 टीータイム（閏年あれこれ）

※神功皇后とは持統のこと。新羅のクーデター首謀者を懲戒した事実が「新羅征伐」の真相だった。

2012年度（⑭：2012年7月から2013年5月まで）

第79号：前方後円墳の謎を解く／前方後円墳について／金蔵山古墳の埴製盒子／編集部 टीータイム（「考える」）

※前方後円墳は韓半島から移動した。前方後円墳の「前方」部は鉄器倉庫だった。韓国固城現地取材をまじえた考察。

第80号：韓国語と日本語「李寧熙の法則」を中心に／編集部 टीータイム（80号を迎えて）

※法則に則って、日本語と化した韓国語。十二法則を一挙掲載。

第81号：応神天皇の謎を解く／王仁の足跡を辿る／上野公園の王仁碑／出雲路を歩く（その三）（寄稿）

※応神天皇とは、百済王子辰孫王と新羅王文武のダブルイメージで作り上げられた天皇だった。百済から王仁博士の顔で来日した辰孫王は、日本で二番目に大きな前方後円墳の主になった。

第82号：『万葉集』巻第2-85・磐姫皇后作／編集部 टीータイム（水田のことなど）／出雲路を歩く（その四）（寄稿）

※応神天皇皇后磐姫は何故、八田皇女にそれほど嫉妬したのか。日本史における瀧の存在の大きさがうかがい知れる一首。

第83号：「日本書紀歌謡」41／小豆島の応神天皇／編集部 टीータイム（「一万時間の法則」など）

※もう一人の応神こと文武大王は、炭を作って新羅に送っていた。100万都市ソラボルを支えた鉄の陰に日本の炭があった。

第84号：『万葉集』巻第3-391・沙弥満誓作／笠氏の跡を辿る／編集部 टीータイム（解説こぼれ話）

※二重義のハイライト「足柄山」は「韓のお姫さま」をあらわしていた。「尊いお方だったのに」という麻呂の後悔の歌。



第69号：『万葉集』巻16-3827・長忌寸意吉麻呂作／二組の双子の天皇／越路を歩く（2）（寄稿）

※『まなほ』創刊号で人麻呂の歌と共に解説された長忌寸奥麻呂の巻第3-265歌は人麻呂の死に繋がる歌だった。双六の数字をよんだ単純な歌に見える巻16-3827歌も、双子姉妹が天皇位を継承した証言歌だった。

※『書紀』顕宗・仁賢紀に書かれていた元明と元正の記録。

前編福井県に引き続き、石川県を経て富山に至る越路の検証では、伽耶人から高句麗人の足跡を目にできた。

第70号：『万葉集』巻3-393・満誓沙弥作／養老改元の真相／69号までを振り返って

※満誓沙弥こと笠朝臣麻呂は、双子の姉元正Aの夫だった。不比等は双子の妹元明とも関係を持つ。元正は二人いた！

第71号：『万葉集』巻1-76・元明天皇作／『続日本紀』の書かれ方／編集部ティータイム／古代伽耶の地を訪ねて（前編）（寄稿）

※申年に殺された人麻呂の亡霊が女帝を恐喝する。平城遷都の理由は申年の恐怖だった。

第72号：『万葉集』巻1-78 一書云、太上天皇御製／編集部ティータイム（「東日本大震災」）／古代伽耶の地を訪ねて（後編）（寄稿）

※歌の作者は元明天皇ではなかった。明日香に残るという姉の言葉に捨て台詞で応える元明。元正Aは二度即位していた事実も明らかに……。

2011年度（㊤）：2011年7月から2012年5月まで

第73号：『万葉集』巻1-79・或本、藤原京より寧楽宮に遷りし時の歌／編集部ティータイム（双子物語）／既刊案内

※作者不詳の歌は、元正Aの作だった。毅然と「奈良へは通う」と宣言。

第74号：『懷風藻』の謎／編集部ティータイム「漢字のことなど」／「大和の中の加耶」（寄稿）

※日本最古の漢詩集は『万葉集』新解明の鍵だった。葛野王・文武天皇・長屋王そして、『万葉集』に一首も残していない藤原不比等の作品を通して、歴史を探る。

第75号：日朝古代交流の真相—『三国遺事』などの記事をもとに／細烏女の足取り／アメノヒボコの足跡を辿る（寄稿）

※『書紀』の新羅王子天日槍は、『三国遺事』の延烏郎だった。延烏郎は鉄作りをするため日本へ渡ってきた。その目的は昔氏の復権だった。

※延烏郎の妻細烏女はどうやって日本にきたか、また延烏郎こと天日槍の足取りはつかめるのか

第76号：「栲衾新羅の国」の謎を解く／岡山の地名をたどる／編集部ティータイム（新羅伐休王は昔脱解の孫）

※「栲衾」は栲で作った「布団」ではない。眩い金銀で彩られた新羅讃歌。「長刀」の意の吉備こと岡山は「鉄のワンダーランド」だった。



第62号：『万葉集』巻8-1465・藤原夫人作／花散里はもうひとりの五百重娘／信濃を訪ねる（後編）

※文武の子新田部を生んだ五百重は、文武に「鉄城王よ鉄を取りに行け」と叱咤していた。『万葉集』の「ほととぎす」は殆ど文武の別名だった。7年に一度、善光寺のご開帳に誘われて出かけた信濃は巨大古墳・銅鐸・銅剣同時出土と「鉄出る地」の名に恥じない古代王国だった。

第63号：『万葉集』巻8-1466・志貴皇子作／編集部ティータイム（ほととぎす）／寄稿・信濃路を歩く（上）

※五百重に従って文武は鉄を取りに行った。突然訪問され困惑する志貴に文武は「手を結ぼう」と提案。

第64号：『万葉集』巻8-1467・弓削皇子作／編集部ティータイム（ほととぎすその2）／寄稿・信濃路を歩く（下）

※弓削は志貴に「長皇子を巻き込んで鉄野を掌握しよう」と提案。品治を皇位につけるべく動こうとしていた。信濃路を北から南まで歩いて古代信濃の人や文化の流れは日本海からと検証した寄稿「信濃路を歩く」の完結編。

第65号：『万葉集』巻1-73・長皇子作／昔脱解と金首露王／編集部ティータイム（『鉄を制する者国を制す』）／赤塚諏訪神社の田遊び

※長皇子は製鉄巫女を連れて海を渡り、鉄作りで文武の登極に尽力する意志を宣言した。

第66号：シナノ 信濃の地名と方言を考察する／慶州取材記／編集部ティータイム（シナノ物語）

※鉄のシナノ各地の地名は鉄に溢れていた。「21世紀に残したい信濃方言」ナンバーワン「ずく」は、やはり古代韓国語だった。

2010年度（㊿：2010年7月から2011年5月まで）

第67号：『万葉集』巻1-2・舒明天皇作／編集部ティータイム（諡号は語る）／越路を歩く（1）（寄稿）

※舒明こと百済武王が香具山から見た煙は「民の竈」と「製鉄の煙」。舒明の「国見歌」は「ヤマトと百済讃歌」だった。

古代の表玄閼越の国。福井県南越前町から北上し、検証開始。

第68号：『万葉集』巻14-3374・武蔵国歌／編集部ティータイム（名月・武蔵野・下野）／藤原氏のルーツ、昌寧を訪ねる（寄稿）／『まなほ』既刊の内容

※孝謙と道鏡は東で国造りをしていた。東歌はやはり「報告書」だった。王陵級の王墓から日本式割竹木棺が発掘された韓国慶尚南道昌寧は藤原氏のルーツの地。光と水の地古代火非伽耶の実地調査記録。





2008年度 (⑩：2008年7月から2009年5月まで)

第55号：『万葉集』巻19-4224・藤原皇后作／『源氏物語』の光明子

※光明子はやはり文武の娘だった。父の住んだ吉野宮を修復して見まわる光明子と聖武。新羅言葉のつぶやきを側近が筆記していた。

※『源氏物語』がモデル小説であることを証明するモデルたちの群れ。紫式部のイジワルな設定も明らかに……。

第56号：「古事記歌謡50」天皇作／編集部ティータイム（古い記憶を捨てない日本人）／『李寧熙が解いた古代地名を歩く』を出版して（寄稿）

※天皇が酒に酔って歌ったという歌には鉄作りの技術者を迎え、やれやれと胸をなで下ろす心情が吐露されていた。酒作りと鉄作り、セットの歌。

第57号：志貴皇子の秘密に迫る／『源氏物語』と鏡王女／ススコリの村を訪ねる（寄稿）／編集部ティータイム（ススコリ・瓜・七夕・東歌）

※志貴は父天武の影武者だった。東国の勢力掌握に活躍。死に行く鏡王女の願いに応え枕元に立ったのは影武者だった。第56号で解説されたススコリの村は京都郊外に実在した。酒屋神社も発見。実地踏査の記録。

第58号：『万葉集』巻1-27・天皇作／吉備の中山の姫社／編集部ティータイム（吉備路を訪ねて）

※「持統が文武の子を生んだ」吉野で密告者があらわれ、持統はついに天武に謝った。天武は文武そっくりな舎人を「見よ、見よ」と叫ぶ。

偶然、岡山で発見した女神ヒメコソは鉄の女神。

第59号：和風諺号「足」に迫る／編集部ティータイム（諺号の魅力）／玄界灘沿岸、北部九州を歩く（上）（寄稿）

※8人の天皇と1人の皇后の諺号につけられた「足」は、朝鮮半島からの「逃亡者」を指す名称だった。「足」のつく和風諺号に迫る。寄稿はいち早く日本列島にやって来た歳の人々の足跡を糸島半島を中心に実地踏査。

第60号：『催馬楽』真金吹／編集部ティータイム（諺号の魅力）／玄界灘沿岸、北部九州を歩く（下）（寄稿）

※催馬楽はサイバラ「鉄続き野」の意。サガ（鉄磨ぎ）天皇は平安文化の礎を築いた。寄稿は福岡・宗像を中心に、韓国茶戸里まで足を伸ばした実地踏査の後編。

2009年度 (⑪：2009年7月から2010年5月まで)

第61号：『万葉集』巻8-1461・紀郎女作・巻第8-1463大伴家持作／信濃を訪ねる（前編）／編集部ティータイム（「恋」物語）／『まなほ』既刊の内容

※紀郎女は夫に代わり合歓に託して家持に鉄をねだっていた。鉄城一家の没落を実感させる切実な歌。家持は明確な返答を避けた。





第47号：『人丸秘密抄』の謎を解く／『源氏物語』と柿本人麻呂／「人麻呂の里を訪ねて」（益田柿本神社同行記）／「柿本大明神」（柿本人麻呂秘伝はどのようにして生まれたか）

※歌聖として崇められた柿本人麻呂は、聖武天皇の実父。母宮子と人麻呂の関係を暴く江戸時代の秘伝書には暗号のように記されていた。聖武は父に捧げるため大仏を建立した。

第48号：『万葉集』巻6-989・湯原王作／「怨霊物語」（湯原王の息子壹志濃王とは？）／編集部 टीータイム（お花見四方山話）

※鉄城王こと志貴皇子の息子・光仁の兄湯原王は、酒を賄賂に鉄を入手していた。政権交代の嵐の中で必死に生き抜く姿があらわに……

2007年度（㊤）：2007年7月から2008年5月まで

第49号：『万葉集』巻3-236・天皇作／『源氏物語』の中の草壁皇子／『源氏物語』比較系図／編集部 टीータイム（『旧約聖書』から）

※草壁皇子は母持統の手の者に「縛られてころされた」？持統天皇に繰り返し草壁消しを囁いた志斐姫とは一体何者？

第50号：「美しい日本語」の語源（上）／編集部 टीータイム（語源あれこれ）／李寧熙の変転の法則

※あかつき・あずま・雨・霰……たから・かしわ・かつばれまで「純やまとことば」こそ「純韓国語」だった。具体的な韓国語から「詩」へと昇華した日本語の数々。

第51号：「美しい日本語」の語源（下）／宗像同行記

※「大地に生える毛が木」「幸せをもたらす鉄器がさち」「日本美学の中心概念侘びと寂びとは？」たそがれは「誰そ彼」ではない……

第52号：諡号「神武」「神日本磐余彦」を解く／「鬼の里国東」取材同行記／編集部 टीータイム（DNA鑑定の行方）

※天武天皇の前身は高句麗將軍淵蓋蘇文。筑紫・安芸・吉備・河内・草香……「神武東征」の道は「鉄の道」だった。

第53号：「美しい日本語」の語源Ⅱ（上）／糸島半島取材記／編集部 टीータイム（両面宿禰の謎）

※身体語・天体語・数詞は基礎語の三つの柱で、この三つが一致すれば二つの言語は同系統と見做される。天体語「月」を中心に、父・母・乳・時・名・菜・魚などの日本語の語源を解明。

第54号：「美しい日本語」の語源Ⅱ（下）／編集部 टीータイム（日本の従来の語源説は珍説・奇説・笑説？）

※「美しい日本語の語源」シリーズ最終回。「はじかみ」「ひなた」「ひねもす」「ひよこ」から「笑う」「われ」まで純日本語ほど純韓国語だった。





- 第40号**：日本書紀歌謡69・木梨輕皇子作／編集部 टीータイム（講演報告）／巾着田の曼珠沙華と高麗神社を訪ねて／一時間100単語「足」から「私」まで
 ※木梨輕皇子と輕大娘兄妹の情事に政変まで、再創作された歌からは天智と間人兄妹が双子だったことや家系まで明らかになる。東京・大阪での来日講演報告と日本語の語源100単語一覧表も掲載。
- 第41号**：日本書紀歌謡69の真相を明かす／伊予・道後温泉を検証する／編集部 टीータイム（40号までを振り返って）
 ※『書紀』の謳う「万世一系」は大ウソだった。天武の子・文武の子が天智の子とされ、実子は消され、「そして、誰もいなくなった」。『万葉集』の新解説から再構成された「真の系図」も掲載。
- 第42号**：桃太郎の謎を解く
 ※五大昔話の一つ「桃太郎」に隠された秘密を解説。桃太郎は高市皇子だった。お供の犬・猿・雉は誰か？ 氣比神宮にあった桃太郎神像の謎は？ 皇子と名を取り替えた氣比大神とは何者？ 高市皇子のダブルイメージ安閑・宣化天皇の和風諡号が証言するものは……。
- 2006年度**（⑧：2006年7月から2007年5月まで）
- 第43号**：釜石の地名と虎舞の謎／釜石同行記／
 ※虎のいない日本の、しかも東北地方の太平洋沿岸で何故、「虎舞」が舞われているのか。ヒントは日本海を流れる超高速海流にあった。「かまいし」の語源は「魚を干すところ」という従来説をばっさり。東北地方の地名「アイヌ語源説」は、枕詞同様巨大な屑籠。
- 第44号**：『万葉集』巻8-1537・1538・山上憶良作／編集部 टीータイム（秋の七草のフシギ）／多氏一族の足跡を訪ねる（寄稿）／『原色牧野植物図鑑』による「秋の七草」
 ※「萩・尾花……」広く親しまれる「秋の七草」はこの憶良の歌に始まるとされる。秋の花を列挙しただけに見せかけた歌は、二首で「鉄を取り戻しに行け」と聖武を叱咤激励していた。
- 第45号**：『万葉集』巻8-1653・県犬養娘作／『源氏物語』と県犬養宿禰橘三千代／編集部 टीータイム（なでしこアラカルト）／多氏一族の足跡を訪ねるⅡ（寄稿）
 ※不比等の妻県犬養三千代は文武の息子高安王を生んでいた。衝撃の事実とはまたしても『源氏物語』に裏付けられた。
- 第46号**：『万葉集』巻8-1654・大伴坂上郎女作／『源氏物語』と坂上郎女／古代宮廷人物比較系図／「花祭り」を見る／編集部 टीータイム（謡曲「翁」は鉄作りの歌）／
 ※『万葉集』に84首を残した大伴家の家刀自、坂上郎女は三千代と文武を「いい気味だ！」と詠っていた。





第32号：『万葉集』巻8-1600・1601・石川朝臣広成作／『源氏物語』と石川広成／銅鐸の出土地を考察する（その2）（寄稿）

※「自分が鉄作りをしに行けるよう頼んでくれ」広成は大伴家持に転職嘆願書を書いていた。皇子として『源氏物語』に登場していた広成兄弟。

『源氏物語』と実在人物の比較系図掲載。

第33号：『万葉集』巻8-1539・1540・聖武天皇作／銅鐸の出土地を考察する（その3）（寄稿）

※聖武は「東国へ逃げた」のではなく、鉄を取り戻しに行ったのだった。歳の復興へ情熱を掛ける聖武の悲願が東大寺だった。寄稿は判明している銅鐸出土地300箇所約半数150箇所の実地踏査記録完結編。

第34号：『万葉集』巻6-1209・大伴家持作・巻6-1030・聖武天皇作／大伴家持と『源氏物語』／編集部ティータイム（「鉄お呉れ」神社に初詣）

※家持は「製鉄場を把握しに行きましょう」とはっぱをかけ、「そっくり戴こう」と応じる聖武。二人の深い絆がよく分かる。ティータイムでは月読命の正体を追究。大伴家持・坂上郎女・聖武関係略図掲載。

第35号：新解説「や」を解く／編集部ティータイム（名は体を表す）／「や」拾い書き

※「八」が作った国日本・「国生み神話」の謎の言葉を解説。伽耶と倭を繋いだ兄妹イザナギは「繋ぎの開祖」イザナミは「繋ぎの女王」だった。

第36号：『万葉集』巻19-4268・孝謙天皇作／宝鏡寺取材同行記／『まなほ』既刊案内

※鉄の天皇聖武の娘は、鉄づくりにも精通していた。未曾有の鉄大消費、東大寺建立の最中「夏だからといって遊んでいるのは何事！」と大叱責。孝謙は結婚していた。夫は「皇太子」道祖と大炊の二人。

2005年度（㉔）：2005年7月から2006年5月まで

第37号：『万葉集』巻19-4268・孝謙天皇作・裏訓み／編集部ティータイム（解説裏話あれこれ）／難波の比売許曾神社

※孝謙の夫道祖と大炊、道鏡は、文武の孫だった。大炊の父、舎人皇子出生の秘話と、道鏡の出自を解明。8世紀「日本天皇家系真図」掲載。

第38号：『万葉集』巻13-3312・作者未詳／「夢に見る泊瀬」（長谷寺取材同行記）／編集部ティータイム（「飛騨高山取材」こぼれ話）

※夜這いする天皇とは何者？ スメロキとは「鉄山国王」の意だった。終句には孝謙への警告も……。孝謙没時の『統紀』の記録は謎だらけ。

第39号：「猿蟹合戦」を解く／「蟹満寺探訪」（長谷寺取材同行記）／地名平尾を辿る（寄稿）／編集部ティータイム（溶接工場取材記）

※五大昔話の一つ「猿蟹合戦」には鉄を廻る葛藤が隠されていた。登場人物猿・蟹・白・栗・牛の糞の正体は？韓国版「猿蟹合戦」である「おばあさんの虎退治」とはどう繋がるのか。寄稿での地名「平尾」は本当に鉄関連地なのか。全国50余の三分の一を検証。





第24号：神々の名前を解くⅠ／金砂田楽を見る

※福姫・曾福女・楽々福・菅福・素戔鳴…神々の名前を解くと、生身の韓国人が続々現れる。素戔鳴は召西奴の息子沸流なのか。古代出雲の製鉄は1世紀に始まっていた？

2003年度（⑤：2003年7月から2004年6月まで）

第25号：神々の名前を解くⅡ／奥出雲たたら同行記／たたら用語解説一覧

※可美葦牙彦舅尊・天照大神・大日靈貴・豊受大神・大穴牟遲・下照姫・稚國玉・味耜高彥根神・高皇產靈尊・比売許曾・金屋子神
 ※『書紀』冒頭の神は「鉄刀」をあらわす名前だった。最高神とされる天照はじめ、女神たちの名前を解くと「鉄」がぞろぞろ……。現地取材による考証をまじえ、解説。

第26号：蚩尤の謎を解く／編集部 टीータイム（弥生繰り上がり大変記）／ブルガサリ（韓国の民話から）／宇陀野^{チウ}に行く（寄稿）

※中国・韓国の古史書に登場する蚩尤天王。黄帝を悩ませた伝説の製鉄王は古代韓国語で「物作り王」をあらわす名前だった。
 ※『まなほ』16号で解明された明日香の地名から、鉄を求めて宇陀野を徹底的に探査した寄稿は今までの解説の正しさを証明した。鉄にまつわる韓国民話も紹介。

第27号：『万葉集』巻8-1608・弓削皇子作／弓削皇子探索レポート／編集部のティータイム（『万葉集』の詠まれ方）

※弓削皇子は、丹比真人こと新田部皇子に父親殺しを唆していた。
 ※新解説に基づき、『源氏物語』から実在人物を探し出す「探索レポート」『万葉集』と『源氏物語』は日本史真相追究の鍵だった。

第28号：『万葉集』巻8-1609・丹比真人作／宇陀の野に品治を探す／その後の但馬皇女と新田部皇子／編集部のティータイム（同行記こぼれ話）

※「親父を殺せ」と迫る弓削に、毅然と「父と対決せぬ」と応える新田部皇子。相聞歌が詠まれたのは持統10年7月～8月と判明。

第29号：謎の地名・人名を解く／天神様の謎に迫る／「猿投・挙母」同行記／風の神シナツヒコを追って（寄稿）

※愛知県豊田市の旧名挙母に秘められた古代史。周辺難訓地名の解説から天智・天武の葛藤も見える。天神様こと菅原道真も、製鉄関連者だった。

第30号：役行者の謎を解く／役行者覚え書き／役行者と『源氏物語』

※修験道の祖、役行者は新羅に渡り、新羅郷歌『老人献花歌』を遺していた。『老人献花歌』の一部新解説で真実に迫る。役行者と『源氏物語』の接点とは何か。

2004年度（⑥：2004年7月から2005年5月まで）

第31号：『万葉集』巻4-696・石川広成作／銅鐸の出土地を考察する（その1）（寄稿）／編集部のティータイム（「李寧熙後援会」5周年を迎えて）

※文武の息子広成は始祖品治に呼びかける歌を詠っていた。天日槍の但馬は品治の鉄の場でもあった。寄稿では出土地の実地踏査記録で銅鐸と鉄の関連が見えてくる。ティータイムでは出会いの数々を紹介。



第17号：親善特集・日本語から習える韓国語Ⅰ「李寧熙の法則」を中心に／編集部ティータイム（白兔物語）

※古代韓国語は法則に従って整然と日本語に成り変わった。法則を適用すれば日本語から韓国語に行き着くことができる。語源が分かると、日本語の意味も鮮明になる。「李寧熙の変転の法則」1～5まで。

第18号：日本語から習える韓国語Ⅱ／韓日単語対応表

※李寧熙の「変転の法則」続き：第17・18号で取り上げた単語の日・韓対応表を収録。日本語125単語の語源が一挙に判明。幼児語・儀式用語・技術用語は変化しない。ハッケヨイ・残った・つるぎ・鎌・めんめ・まんま…現代日本語にそのまま使われている古代韓国語の数々。

2002年度（④：2002年7月から2003年5月まで）

第19号：（韓国国宝）「迎日冷水里新羅碑」碑文の解説・地名・人名を中心に／神光取材同行記／狭井川のことなど（寄稿）

※韓国内現存最古の新羅碑に記された文章は鉄の採取権を保証する内容だった。新羅男は日本に渡り、神になった。日本神話が甦る503年の記録。

第20号：（国宝）「隅田八幡人物画像鏡銘」銘文の解説・地名・人名を中心に／編集部ティータイム（20号記念鼎談・『日本書紀』の読み方）

※銘文は新聞記事のように単純明快だった。503年は日本で本格的な製鉄が始まった古代日本産業革命の年。韓国国宝と日本国宝はどちらも鉄に関する記録だった。

第21号：『万葉集』巻2-103・天武天皇作／王の地・知多（取材同行記）／「平成大直刀」作りと鹿島神宮「御船祭」

※捨て置いた妻、五百重娘に子供が出来た。うろたえる老天武。一見平凡な歌も衝撃的な二重歌だった。天武・文武父子に関わる法海寺取材で明らかになった知多の鉄関連地名解説も併せて収録。古代の製鉄場に現代の製鉄所がある不思議。古地名が証明する鉄産地。

第22号：『万葉集』巻2-104・藤原夫人作／鉄の王国美濃（取材同行記）／地名信濃を考える（寄稿）

※「相手は子だぞ」と詰め寄る天武に、「天皇に言おう」と藤原家の矜持で応える五百重娘。生まれた子新田部皇子は結局天武の子にされた。壬申の乱時、天武の食邑として重要な役割を果たした美濃は「鉄の王国」だった。美濃一宮南宮大社に伝わる「蛇山神事」の秘密に迫る。

第23号：『万葉集』巻3-262・柿本人麻呂作／編集部ティータイム（鉄物語Ⅱ）

※得意技「セクシヤルな悪口」で成人した新田部皇子に「お前の本当の親父は新羅の浮気者、文武だ」と告げる人麻呂。人麻呂は藤原貞慧の落とし胤なのか。



第9号：月の異称「睦月から皐月まで」／「韓・日両国の身体語」（『歌う歴史』より）／編集部ティータイム

※月の異称は「農耕と鉄のカレンダー」だった。

第10号：『日本書紀』の書かれ方Ⅰ 副題『万葉集』を訓むと日本史が見える
 ※天武4年から天武10年までの『日本書紀』の記述を順に解明。神功皇后紀の難訓神名に隠された暗号を新解説。仮名で密かに来日した新羅王子・後の文武は実父天武と対面した。神功皇后の新羅出兵が意味するものは？

第11号：『万葉集』巻8－1418・志貴皇子作／「2002年韓日共催ワールドカップサッカーのためのシンポジウム」主題論文要旨：韓国人が見た日本
 「清潔、団結、そして優越劣等意識」／「鏡王女探訪」（寄稿）

※春雑歌の冒頭にある有名歌の真の意味は…。志貴皇子は天智の子ではなかった。何の「権び」の歌か分からなかった誤訳歌。天智一派による鎌足の子貞慧暗殺を暴露する。

第12号：『日本書紀』の書かれ方Ⅱ／編集部ティータイム（韓国語四方山壱）

※天武11年から持統紀まで。天武の死と後継争い、持統朝の実態から文武即位に至る過程を徹底追究。文武には60歳で持統との間に設けた娘がいた。「60にあたりて生める……」という名の皇女は多紀。巻末に新解説済み関連万葉歌を掲載。

2001年度（③：2001年7月から2002年5月まで）

第13号：月の異称Ⅱ「水無月から師走まで」／『万葉集』から見た七、八世紀…歴史と言葉の絆について／「幸福」の日本語「幸」は新羅言葉／「再び飛鳥」（寄稿）／編集部ティータイム（合い言葉は「原文を探せ」）

※第9号の睦月から皐月までと併せ、師走までの12ヶ月を解説。月の異称は農耕と鉄のカレンダーだった。「魏志倭人伝」の官職名シマコは「鉄集め人」へココは「稲取り入れ官」。「鉄と稲」は古代の富の構図。

第14号：『続日本紀』の童謡を訓む／汗の結晶報われる（明日香取材同行記）／編集部ティータイム（鉄物語）

※『続日本紀』唯一の童謡は、白壁王こと光仁天皇の、政治的後盾が鉄だったことを物語っていた。「能にあつて能に非ず」といわれ、演者が精進潔斎して臨む神聖な謡曲「翁」のドウドウタリとは何を意味するのか。

第15号：『万葉集』巻第12-3098／夏の難波の雨の中（大阪取材同行記）／「性愛歌なのか反体制の歌なのか」（『歌う歴史』より）

※娘を皇位につけようとしていた持統の思惑をよそに、勝手に結婚してしまった多紀皇女。驚いた持統の罵声と人々の批判の声を代弁した歌。この解説は第37号の道鏡出自解明に繋がる。

第16号：奈良・明日香の地名に迫る／吉野の鮎（明日香取材同行記Ⅱ）

※明日香地方は「どこを掘っても鉄が出る」。現地取材を交え、その地名の意味を解説。飛鳥・御所・葛城・橿原・磯城・曾我・蛇穴・三輪・斑鳩・檜隈・狹井・忍坂……地名から歴史が見えてくる。



『まなほ』既刊の内容

1999年度 (①: 1999年7月から2000年5月まで)

創刊第1号: 『万葉集』巻3-264・柿本人麻呂作／巻3-265長忌寸奥麻呂作

※人麻呂の有名歌は文武夫人藤原宮子へのラブレターだった。日本古典の代表的作品『源氏物語』のモデルは6・7世紀の万葉人! という新説も紹介。日本史の真相に迫る鍵は『万葉集』の真の解説と『源氏物語』『日本書紀』『古事記』などの読み合わせにあった。

第2号: 『万葉集』巻3-266・柿本人麻呂作／「白錦後苑」は慶州「雁鴨池」のミニチュア版／「飛鳥池遺物の謎」その1「富本銭」その2「飛鳥池井戸杵の落書き」

※韓国語のフォーカスで遺跡発掘を追究すると、鮮明な意味が浮かび上がってくる。

※1号・2号の巻3三首の連続解説で、『万葉集』の明確な編集方式が判明。

第3号: 『万葉集』巻2-91・天智天皇作／『万葉集』巻2-92・鏡王女作

※「相聞歌」には違いないが具体的で衝撃的な夫婦の会話から歴史の真実があからさまになる。不比等は天武の子だった。不比等の父となった藤原鎌足は、大和の鉄を牛耳る「鉄の親分」だった。

第4号: 『万葉集』巻2-93・鏡王女作／「天武天皇は淵蓋蘇文か」(『歌う歴史』より)

※『日本書紀』などと比較検討すると万葉歌の作歌時期の特定も可能になる。鎌足の動きを封じた鏡王女の宣言。権力闘争の陰に「鉄」を巡る争いがあった。

第5号: 『万葉集』巻2-94・藤原卿作／「古代韓国語でよまれた日本の古地名」・「韓国語になった日本語」(『歌う歴史』より)

※91～94(95の大意を含む)の連続解説で、鏡王女の出自、不比等出生の秘密など、日本歴史の根源に迫る。『日本書紀』の読み直しも可能になる。

第6号: 数詞の語源「一・二・三…十・百・千・萬」／「日本列島覇権を争う濊と貊」(『歌う歴史』より)／神々の名前を解くと歴史が現れる

※日本数詞は高句麗語だった。基礎語の一つ数詞が整然と解明され、数詞に込められた高句麗の野望が明らかに……。

2000年度 (②: 2000年7月から2001年5月まで)

第7号: 三重県無形文化財「大王町わらじ曳き」祭文／「文武王は淵蓋蘇文の息子なのか」(『歌う歴史』より)

※大王町に伝わる祭は文武救出劇の再現だった。新羅王文武は、唐の圧迫から逃れるため、死んだことにして日本へ亡命した。嵐で遭難した文武を救った大王町の人々は、祭りを今に伝える。

第8号: 『万葉集』巻8-1419・鏡王女作／「法隆寺の謎の十二文字」・新羅の「ハンガウィ」と日本の「賀我比」・「日本に渡ったサブサルゲの話」(『歌う歴史』より)／語源エッセイ「老人運転」

※鎌足の息子貞慧は、中大兄に殺された。鏡王女の歌は、中大兄と同母妹間人の恋も告発する。